

子どもの体験学習における造形活動の一考察

—米子彫刻シンポジウムにおける「彫刻教室」の実践について—

A consideration of forming activities in a summer school:
Sculpture Workshop in Yonago Sculpture Symposium 2006

佐善 圭

SAZEN Kei

In recent years, as is commonly known, drawing, craft, and art hours in school education have been cutting back. As the consequence of this reducing, children are very often to be educated by packaged art kits through a catalog order ...to accomplish the effective and rapid result, Yet in this controlled circumstances children lose chances of touching and feeling heart of naked natural materials such as logs with barks or rough stones and seldom have opportunities of experiencing pleasure and difficulty in art creation. Is this situation around art education really O.K? never. As Manabu Sato Sates the very requisite for modern children is true art education and experience which can gift outstanding opportunities of encountering 'another reality', 'another world', 'another self' and 'another being'. Children need art as 'the way of living' now.

This consideration shows the remarkable fruits which children accomplished in *Sculpture Workshop in Yonago Sculpture Symposium 2006*, which I joined in this summer, and analyzes the effects which real art experience can bring to. Techniques, pleasures, and fulfillment which children acquired through plastic activities/art creation were the very gates to another world ...and also for me as an art educator. Art blooms beyond age. Therefore it can communicate with children.

はじめに

近年、学校教育の現場で、図画工作科、美術科の時間数が削減されているのは周知の通りである。そのため短時間で制作ができる美術教材の多くはカタログから入手され、ビニール梱包されたまま子ども達まで届いている。樹皮のついた丸太や無垢の原石などは、触れる機会さえなくなり、当然のことながら体験を基に自然の素材を語り、表現することの楽しさや難しさを経験できる機会は減っている。

この様な現状を危惧する佐藤学も「現代の子供にもっと必要なのは、アートの教育なのではないか。そして、現代の子供がもっとも渴望しているのも、アートの経験なのではないか」¹と述べている。本来アートは、創造活動における人間の成長に重点をおき、自己表現を進め、つくることへの達成感や充実感を享受することにあつた。佐藤は「アートは「芸の技法」であると同時に、「もう一つの現実」「もう一つの世界」「もう一つの他者」「もう一つの自己」と出会い対話する創造的行為の技法のすべてである。新たな意味の創造と新たなコミュニケーションの創造によって「もう一つの自己」と「もう一つの世界」を「生きる技法」と言い換えてよい²とも、述べている。

そこで本研究では、筆者が今夏参加した2006米子彫刻シンポジウムでの「彫刻教室」を取り上げ、子どもの体験学習の実践過程を分析し、自然素材による造形活動が子ども達にどの様に作用し、如何なる体験であったのかを、体験後のアンケート調査を交え、考察するものであ

る。子どもが造形活動の中で多くの技能を身につけ、つくるという行為の楽しさや充実感を体感するために、表現者である作家が、自己の表現活動を通して、美術教育を教えていくことは、非常に意義のあることだと考える。筆者は、子供と大人がふれあい、アートを互いの言葉として対話する時、そこに生きた感動が生まれると考えている。以下の実践において明らかにしていきたい。

1. これまでの経緯

(1) 米子彫刻シンポジウムについて

まず、本研究の題材である「彫刻教室」の実践について述べる前に、開催の場となった米子彫刻シンポジウムの成り立ちについて見ていただきたい。

米子彫刻シンポジウムは、1986年（昭和61年）に、2年後に迫った市政60周年記念事業に参画すべく、米子市美術館の学芸員や、市内の芸術家などを中心に検討されていた。しかし、行政の賛同は得られず、市民の募金を主財源とした民間主導のシンポジウムとして、1988年（昭和63年）に鳥取県米子市で開催されることとなった。後に「米子方式」と呼ばれる、ボランティアによる運営方法も米子シンポジウムの特徴である。以後、ビエンナーレ形式で開催され、第5回からは行政も参入し、官民一体のシンポジウムとして展開してきた。参加者は、国内外の著名な彫刻家が選抜され、約40日間の公開制作を行い、完成作品は、平成7年に計画された「彫刻のあるまちづくり」に基づき、市内の随所へ設置されている。また、このシンポジウムの取り組みや成果は、鳥取県景観賞『まちなみ・緑化部門』で「彫刻のある やさしく

うるおいのあるまち」景観賞の受賞や「美しい日本の歩きたくなるみち500選」の選定などに、現れている。2006年で10回目を迎えた。

参加作家は、以下の通りである。

第1回参加作家、林良一、清水洋一、中岡慎太郎、山谷圭司、新谷一郎

第2回参加作家、鈴木武右衛門、森亮太、井田勝己、須藤博志

第3回参加作家、小林亮介、寺田栄、横山徹、酒井良

第4回参加作家、オダ・ショエラー、富田憲二、田中毅、前川義春

第5回参加作家、氏家慶二、登坂秀雄、百瀬啓一郎、

ロバート・シンドルフ

第6回参加作家、藪内弘、岡本敦夫、大井秀規、ジャ

ン=フランソワ・ドゥムール

第7回参加作家、田中等、西川淑雄、村井進吾、林宏

第8回参加作家、西村文男、高濱英俊、平井一嘉、菱
田波

第9回参加作家、永野光一、西巻一彦、斎藤和子、近
田裕喜

第10回参加作家、岩間弘、明地信之、藤田英樹、筆者

(2) 「彫刻教室」について

1) 概要

初回シンポジウムの開催にあたり、当時の事務局長友松康雄（現会長）をはじめ、彫刻家井田勝己を含む実行委員会のメンバーは、シンポジウム成功の鍵は、幅広い住民の理解であると認識していた。

そこで、既存の彫刻シンポジウムでの成功例を参照しながら、より彫刻を浸透させる視点で市民参加型のイベントを選定した。専門性の高い彫刻芸術の教育的機能を社会に広く貢献させるため、いくつかのイベントと共に「夏休みこども彫刻教室」が提案された。「彫刻教室」は、参加者である小・中学生の子ども達が、彫刻作品の制作を通じ、作る行為の楽しさや新たな表現を発見し、達成感や充実感を獲得することができる。また、直接指導にあたる講師（彫刻家）とのコミュニケーションをはかることを主な目的とし、開催される運びとなった。

過去9回の概要は、次の通りである。

2) 開校年と日程、及び参加者数

第1回1988年（昭和63年）

前期 7月24日～7月30日 7日間 31名

後期 7月31日～8月8日 9日間 17名

「夏休みこども彫刻教室」参加者合計48名³

第2回1990年（平成2年）

8月6日～8月12日 7日間

「夏休みこども彫刻教室」参加者20名⁴

第3回1992年（平成4年）

8月3日～8月10日 7日間

「夏休みこども彫刻教室」参加者11名⁵

第4回1994年（平成6年）

8月2日～8月5日 4日間
「夏休みこども彫刻教室」参加者35名⁶
第5回1996年（平成8年）

8月1日～8月4日 4日間
「こども彫刻教室」参加者28名⁷
第6回1998年（平成10年）

7月30日～8月2日 4日間
「こども彫刻教室」参加者23名⁸
第7回2000年（平成12年）

7月28日～7月30日 3日間
「こども彫刻教室」参加者13名⁹
第8回2002年（平成14年）

7月26日～7月28日 3日間
「ふれあい彫刻教室」参加者18名¹⁰
第9回2004年（平成16年）

7月23日～7月25日 3日間
「ふれあい彫刻教室」参加者21名¹¹

3) 会場

米子市湊山公園シンポジウム会場付近

すべての教室が、米子市湊山公園内で開校されたが、年度によって会場は、若干異なる。

4) 材料

島根県産来待石（きまちいし）

出雲石ともいわれる、島根県松江市の玉湯町から宍道町の東西約10kmにかけての幅約1～2kmに産出する擬灰質粗粒砂岩。約1400万年前ごろ山陰地方の地殻変動と、風化した火山成岩石が堆積して出来た石である。古墳時代には石棺として使用され、また、石塔、石仏、近世釉薬（石州瓦の上薬）、などにも使用されてきた。江戸時代には、松江藩が御止石として持ち出しを禁じ、松江城をはじめ城下に使用されている。第1回の「彫刻教室」から、（有）勝部石材の協力で教材を提供していただいている。

ここで、今までの彫刻教室について補足すると、イベントのタイトルが変更されている。これは、当初、一般的ではなかった彫刻教室への誘引として、「夏休みこども彫刻教室」を掲げていたが、次第に彫刻に理解や興味を示した保護者や地域の方なども参加するようになり、

参加資格を小学生以上と拡大し、多くの参加者を受け入れるようにしたためである。また、「ふれあい」のタイトルは、第2回目のシンポジウムからのテーマとして掲げてきたものである。講師は、前述のシンポジウム参加作家とシンポジウムのアシスタントなどの専門家によって指導されてきた。

2. 「ふれあい彫刻教室」の実践

(1) 活動内容

今回の「ふれあい彫刻教室」は、シンポジウムの開催と共に、第10回目を迎えた。主催は、米子彫刻シンポジウム実行委員会。共催は、米子市、米子市教育委員会、協催に米子市小学校長会、米子市中学校長会、米子市学校研究会、米子市中学校教育振興会、（財）米子市教育文化事業団、米子市児童文化センターなどの教育的機関が名を連ねている。制作の都合上、募集定員は、小学生以上30名程度を予定し、小学生には、なるべく保護者を同伴するよう呼びかけた。

会期は、平成18年8月4日（金）から8月6日（日）の3日間、午前9時から午後4時を活動時間とした。会場は、市内湊山公園彫刻シンポジウム会場横の桜林の木陰の中で開校された。当日までに、申し込みを済ませた参加者は、24名であった。（最終参加者26名、2名の保護者が途中参加した）参加者には事前に、軍手、ゴーグル、もしくはサングラス（石の破片から目を保護するために）、大き目のハンマーを各自用意することを知らせた。特殊な工具に関しては、主催者の責任において確保する義務があるが、保護具に関しては、個人の体型に合うものを主催者が把握し、事前に必要数確保することが難しく、参加者が各自持参することが、望ましいであろう。

今回の講師は、2006米子彫刻シンポジウムの参加作家である岩間弘、明地信之、藤田英樹、筆者の4名と、前回米子彫刻シンポジウム参加作家の近田裕喜、シンポジウムアシスタントの岩永啓司、合計6名で指導することとなった。

(2) 活動の導入時について

初日、各自受付を済ませ、開校式をおこなった。前回

までは、挨拶や彫刻教室の趣旨説明のあと、すぐに制作に取り掛かっていたようであった。しかし、実際に石材がどのような工程を経て彫刻として加工されていくのか、また、これから制作する彫刻が、如何なる歴史の上に存在しているのかなどを説明し、彫刻の出来上がる過程をダイジェストで紹介することで、参加者の作品への興味や、造形への理解がより一層深まると考えられた。

(写真1)

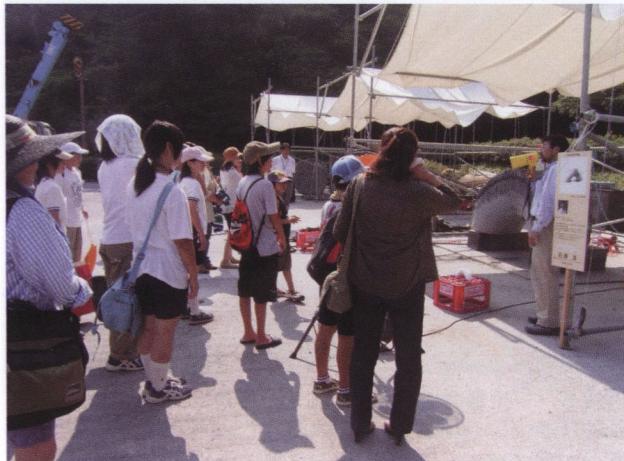


写真1 開校式で作品についての説明を聞く参加者

そこで、今回は石彫の歴史や彫刻家が専門的に使用する手道具、機械工具などの彫刻道具についての説明を筆者が担当することになった。ただ、知識を一方的に教え込むのではなく、子ども達が飽きてしまうと予想できたので、道具を直接触ってもらったり、質問を投げかけたりして、興味を引くように働きかけた。石彫の道具名は、ビシャン、コヤスケなど、現在でも石工職人の隠語、符牒が数多く使用され、普段、聞きなれない言葉の響きに、子ども達は一様に面白がっていた。石彫は各工程に、特殊な道具、工具が存在し、子ども達は、今まで見たこともない工具の一つ一つに関心を持ったようである。特に、空気を動力とする大型の機械工具は、アニメに登場する武器の一種にも見え、参加者からは、「かっこいい」などの声も上がり、子どもたちの工具を見る、私達とは違う視点に驚かされた。次に石材用削岩ドリル（ルートハンマー）で穿孔し、これから使う教材の石が、採石場でどのように割られ、運ばれてきたかなど、実演を交えての説明をおこなった。石に穴を開けるため削岩機を始動させると、その振動と騒音に子ども達は一瞬たじろいでいたが、石割り体験の希望を募ると、ほとんどの子ども

が我先に手を挙げていた。石が大きく割れる瞬間は、決して日常生活では目につくことのない衝撃的な場面である。石の中央に開けられた小さな穴に、慎重に楔を組み入れる。子どもの振り下ろした石頭の衝撃で、見事にふたつに割れた瞬間、参加者からは、大きな歓声と拍手が湧き上がった。(写真2)



写真2 石割りの体験、実際に石を割ってみる参加者

(3) 制作活動の過程と考察

説明後、制作会場へと移動した。まず、作品制作前に作りたい形のイメージを決定させる。参加者を見ると、持参した画用紙にたくさんの絵を描いたり、ノートに細かな平面図を描いてくる子や、紙粘土で作った小さい模型をいくつも持参する意欲的な子どもも見られた。参加者の中には、親子共同で制作するグループもあり、一つの作品を同じ目標に向かって制作する親子の姿は、微笑ましかった。(写真3)



写真3 石にデッサンをする親子



写真4 スケッチと石取りを見てもらう

イメージが明確な子どもは、会場の中にある大小さまざまの石の中から、形に合った石を探し出し、講師と共に作業場所へ運び出した。(写真4) また、石を見てからイメージを膨らませる子どもには、石を触り、転がしながら、自由なアイデアを出させ、表現したいものをスケッチさせる。特に、原石の形から発想する子どもには、個性ある表現を優先させ、ブランクーシの言葉である「直か彫りは彫刻への真の道である」¹²に習い、石の中に見える理想の形を、最善の形として出現させる方策を練つた。筆者は、普段から表現者として制作活動を行っている。そのため、子どもが表現したいという純粋で強い欲求を尊重し、石の作品には難しい形状なども、できる限り実現するよう努めて助言した。また、参加者の中には、イメージする形は鮮明だが、技術的に未熟で希求する形に到達できないという場合がある。講師の技術的援助は、子どもの創造を正しく動機付けるものではないが、提示された技術を試用することで、制作への不安を取り除き、表現への自信に繋げられるならば、作品に手本となる技術的指導を加えることも必要だと思われる。講師は参加者との密接なコミュニケーションを取ることで、個人の表現への要求に応えられるよう、常に会場の状況を把握しておくことが大切だと考える。基本的道具の使用については、一斉に説明できるが、制作の進捗状況が個人によって異なるため、その他の道具や特別な用法については、個人的に指導するほうが、現実的であろう。

今回は連日晴天の中、会場は桜林の日陰で制作することができた。(写真5) 2時間ごとに、全員で一斉に休憩を取り、すいかやアイスなどの冷たい食べ物と大きな

タンクに用意された冷たい飲み物を補給しながら、参加者同士は作品の進行状況を確認しあっていた。特に夏季の作業は、体調の管理に注意を促し、充分な水分補給を知らせる必要がある。今回は、実行委員会、米子市のサポート体制も万全で、体調不良を訴える子どももなかつた。



写真5 一生懸命に石をはつる子ども達

子ども達は、自分達の制作を始めると休み時間や昼食時にシンポジウムの会場へ足を運ぶようになる。「石はこんなに固いのか」、「いくら叩いても削れないぞ」などの実体験を通して、初めて彫刻シンポジウムで制作されている作品の大きさや作業の難しさを実感できるようになる。自己の作品と他者を対比することで自身の位置を確認し、「自己を発見する」ことは、このような体験学習の利点であろう。また、反対に講師が子ども達の真剣な取り組みや創造的成長を自分自身の経験に重ね合わせ、自己表現へフィードバックさせることができることも重要な意義を持つと考えられる。

(4) 仕上げから完成

彫り上げられた作品は、砥石 (#60～200) を使い、研磨して仕上げる。砥石で丹念に手磨きをおこなうと、何とも言えない滑らかな表面になる。それは岩石が川の水流にもまれ、いつしか美しい玉石に変化するような石本来の素材感を味わうことでもある。子ども達は動の作業から作品を見つめる静の作業の変化の中に、素材にふれあう楽しみを味わっているようであった。(写真6) 参加者の中には、完成した作品に墨などで着色する光景も見られた。

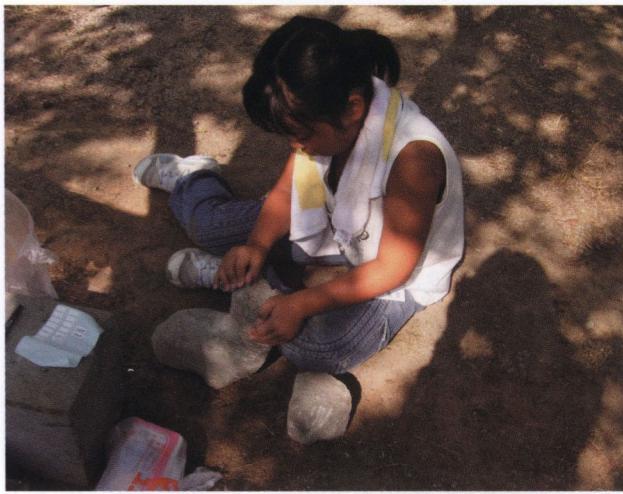


写真6 順番に砥石を使い、磨き仕上げをする

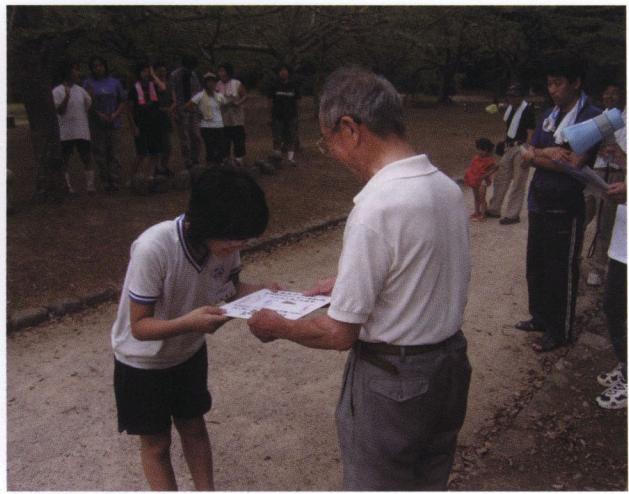


写真8 閉校式では修了証が手渡された

完成した作品は、参加者全員で石の細かい埃を取り払うために、水洗いをした。作品の完成とは、作者の手を離れることであり、作品がよりよく鑑賞してもらえるように提示することは、きわめて当然のことである。しかし、近年、展覧会場において、埃のみならず制作中の切り屑や昆虫の棲み処さえ払わずに陳列されている作品を見かけることがある。制作者も鑑賞者の立場になり、最後まで作品に責任を持つことを指導しておきたい。

会場を清掃の後、中央に一同の作品を並べ、他の参加者の作品を鑑賞すると共に、一人ずつ感想が述べられた。(写真7、8) 後日「評価されることが無いっていいうのは作った満足感と充実感だけが残って、いつも評価されている子供達にはそれこそ暖かい教室なのかもしれない」と参加者の感想に書かれていたが、課外活動の体験学習では、何より作ることの楽しみと作り上げた達成

感を味わうことに重点をおきたい。小・中学生になると学校の評価を気にするあまり、自分の欲求を抑え込み、つくりたい作品を作らない子どもも出現してくる。ローウェンフェルドによれば、初等美術教育の最も重要な意義は、「子供の成長を助長させること」¹³であるという。大人にとって美的に無意味な作品であっても、その制作が子供を成長させ自己を同一化する手助けとなっているならば、その意義を認め、制作を励ますことが重要であろう。美しい完成品に目を奪われず、作品の過程や本質を大切にする指導を大切にしたい。その点でアートによる体験学習は、大変意義のある存在であると考えられた。

(5) 活動の留意点

使用した来待石の産出地は、米子の隣県という立地条件にあり、山陰地方では、建築材や燈籠他に使用されている、使用頻度の高い石材である。しかし、そのような身近な石材でも、採石される状況を参加者の誰も目にしたことはなかった。小さく割られた無機的な四角い教材を、単に工業製品と同様に加工したり、造形したりするのではなく、自然素材への理解を深めるためには、石切場に足を運び、採石場のスケール感や岩盤を切出す臨場感を体験することも必要だといえよう。指導の中に、石材の知識を習得することも組み入れることができると、より広がりある学習となるであろう。

また、このような子どもを対象とした教室で忘れてならないことは、安全への取り組みである。制作には、保護具の使用が欠かせないことや、特に道具の正しい持ち方を指導することで、疲れを軽減し、未然に事故が防げ



写真7 完成作品を並べ、感想が述べられた

ることを的確に伝達しなければならない。初日には、石頭がノミの頭を捕らえず、手を叩く子どもが多かったが、意識を集中し作業に取り組むことで、急速に道具に馴染み、道具と体が一体になっていく姿は、非常に印象的であった。事前に周知していなかったことに履物の種類がある。初日は、サンダル履きの子どもも多く見られたが、安全性を考え、2日目からは運動靴で参加するように指導した。夏の暑い時期であるが、怪我を考えるとできるだけ肌を露出しない着衣で参加することが望ましい。

(6) 展示と鑑賞

完成作品は、8月7日～8月19日の日程で同公園内の米子市児童文化センターでの展覧会「ふれあい彫刻教室作品展」がおこなわれた。夏休みということもあり、12日間の会期中に延べ3562人の入場者があった。多くの人に作品を鑑賞してもらえたことは、大変喜ばしいことである。また、8月21日～8月26日にはシンポジウムのフォーラムにあわせて、米子コンベンションセンターでも展覧会がおこなわれた。(写真9) こちらもフォーラム当日は、約150名を越す来場者があった。作品は、作るだけでなく展示することが望ましい。展覧会では、自分自身の作品を見て楽しみ、他者に見てもらう楽しみも享受しながら、各々の作品について考察したい。更には鑑賞の経験を積むことで、作品を客観的に批評できる目を養うように努めるべきであろう。



写真9 完成作品の展覧会

3. 参加者の意識調査

(1) アンケートの内容

これまで、彫刻教室の実践についてみてきた。ところで、実際に彫刻教室を受講した参加者にとって、彫刻教室とは、どの様な体験であったのであろうか。参加者の意識を知る手段として、後日、参加者に郵送によるアンケート調査を実施し、参加者の26名中24名から返答があった。回答方法は、5段階での回答。ほかに自由記述で一つ記入する項目を設定した。

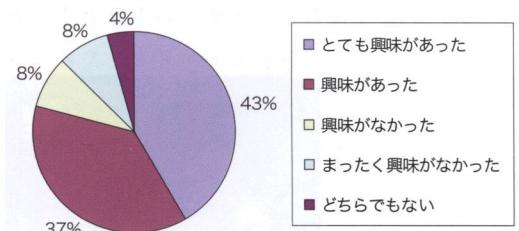
質問の内容は、次の通りである。

- Q 1. 彫刻教室に参加する以前に、彫刻に興味がありましたか
Q 2. 彫刻教室は、楽しかったですか
Q 3. 「Q 2. 彫刻教室は、楽しかったですか」で回答した、理由を書いてください。
Q 4. 講師（彫刻家）のアドバイスは、役にたちましたか
Q 5. 準備された材料や道具は、制作の役にたちましたか
Q 6. 彫刻教室に参加して、彫刻の印象は、以前と比べてどのように変化しましたか

(2) 分析と結果

Q 1. 「彫刻教室に参加する以前の彫刻への興味について」であるが、回答者の合計80%（19/24名）が「とても興味があった」「興味があった」と回答している。（図1）

図1 彫刻教室に参加する以前に、彫刻に興味がありましたか



これは、ひとつに米子市が彫刻のあるまちづくりを創めて約18年が経過する中で、住環境の中に身近な彫刻が点在し、彫刻が市民レベルでの興味として着実に定着、浸透していることが挙げられよう。また、参加者の感想文に「石は学校などで、彫刻教室のような勉強がないから参加した」や「石の彫刻なんてめったにできることではないと思いワクワクした気持ちで家族一緒に参加しました」とあるように、彫刻や造形への興味を持ちながら

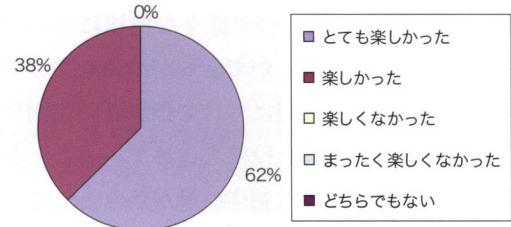
も、学校の図画工作科や美術科の中では、取り上げられ難く、一度は石を彫って見たいと希望していた参加者が、この度の彫刻教室に応募したことが推察できる。また、シンポジウム開催に先立ち、初めての企画として近隣の小学校を訪問し、生徒との交流会が設けられた。そこで彫刻や彫刻家に興味を持った生徒達が申し込んだことも一因としてあげられよう。

「興味がなかった」(8% 2名)、「まったく興味がなかった」(8% 2名)、「どちらでもない」(4% 1名)と回答した者は、中学校美術クラブの課外活動として受講した参加者であった。感想文にも「一日目の最初は嫌だと思いま、「暑いし大変そう。」と思っていた、少しめんどうでした」や「いままでは、彫刻より絵画の方に興味があった」とあるように、体験前は、自主的参加の意識や意欲が低調であったことが見えてきた。山崎・金子による茨城大学教育学部の小・中学校の図画工作科、美術科の調査によれば、小学校の中学年までは図画工作科に対する意欲度がほぼ100%であったものが、中学生では約半分に減少し、美術科の中でも彫塑にいたっては、唯一マイナスポイントとなっているという。¹⁴特に彫塑が嫌いな理由に、「粘土が臭い」と回答されているとあったが、私は、中学生が素材の臭いに嫌悪感を示す他に、彫刻領域が美術科の中でも「危険（きけん）」「汚い（きたない）」「きつい」といわれる3K作業が多く、それが、生徒の意欲を低下させる要因ではないかと考えている。そして、当初、彫刻に興味を示していなかった参加者も、同様の理由から未体験の石彫を敬遠していたのではないかと推察した。しかし、Q 6. の「彫刻教室に参加して、彫刻の印象は、以前と比べてどのように変化したか」の問いには、全員「とても良くなった」「良くなつた」と回答し、今回の彫刻教室を受講したことにより、彫刻に対しより良い変化が見られていることは、特筆すべきことである。

Q 2. 「彫刻教室は、楽しかったですか」の問い合わせでは、回答者の62% (15/24名) の人が「とても楽しかった」38% (9/24名) の人が「楽しかった」と記し、参加者全員がこの体験学習を楽しかったと評価していることが分かる。(図2)

Q 3. 「『Q 2. 彫刻教室は、楽しかったですか』で回答した、理由を書いてください」では、「制作を通じて友人を作り、お互いに励ましあって作品を作りあつたことなどが楽しかった」や「先生からアドバイスをもらつ

図2 彫刻教室は、楽しかったですか



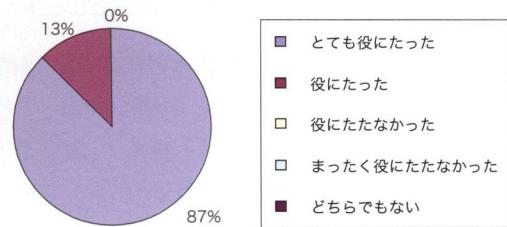
たり、てつだってもらつたりしながらやっていくうちに、うまく出来るようになったと言われてうれしかつたりしました」など、参加者、講師、ボランティアなどが「彫刻」を通して一体となり、世代を越えて多くの人々とのふれあいを持つことができたことが複数回答あった。

また、「とんかちでノミをたたく度に、石が削れていくことがおもしろく、何より形が整っていくと、ちょっとした達成感がありました」や「わたしは彫刻がとてもすばらしいものだと気がつきました。どんどんかたちになっていくおもしろさ、それを完成させるつらさなどがわかったと思います」など、つくる楽しさや難しさを十分に味わい、形ができる達成感や充実感を存分に体感していることも分かった。「先生達はとてもいいようにアドバイスして下さったし、みんなと楽しく彫刻を制作することができたからです。それに、すいかを切って食べたり、料理を手伝つたりと、いろいろな体験をさせてもらつたからです。そのことは、ずっと、忘れません」など彫刻のみならず、いきいきとした彫刻教室の学習全体が、子ども達にとって大きな意味を持っていたことも知ることができた。

Q 4. 「講師（彫刻家）のアドバイスは、役にたちましたか」の問い合わせでは、回答者の87% (21/24名) が「とても役に立つた」、13% (3/24名) が「役に立つた」と記し、参加者全員が講師（彫刻家）のアドバイスが役に立つたと回答している。(図3)

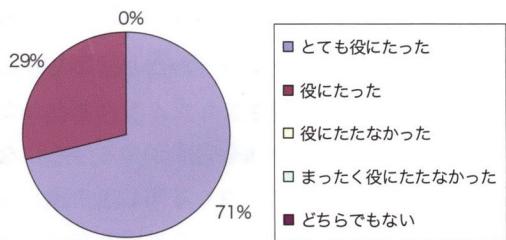
制作過程でのアドバイスは、子どもの活動をより充

図3 講師のアドバイスは、役にたちましたか



実発展させるために重要な役割を担っていると考えられる。また、「彫刻の道具や歴史様々な技法についてたくさんお話をうかがうことができ豊かな時をすごすことができました」など導入時における指導者の説明やアドバイスも制作の上で大きな役割を占めていることが見えてきた。つまり、参加者は制作の足がかりとして、今まで知らなかつた導入時の歴史などの知識や実演なども造形の頼りにしながら、発想を広げたり、構想を深めたりしているのである。評価結果から会場を巡回し、一人一人に細やかに係わり、アドバイスをするという基本的なことが、子どもの充実した造形活動にとって大きな意味を持っているということも確認できた。

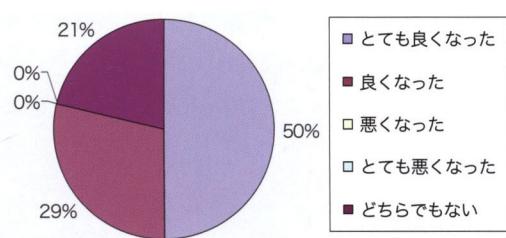
図4 準備された材料や道具は、制作の役にたちましたか



Q5. 「準備された材料や道具は、制作の役にたちましたか」の問い合わせでは、71% (17/24名) が「とても役に立った」、29% (7/24名) が「役に立った」と回答した。(図4)

回答者全員が準備された材料や道具が制作の手助けになったと評価していることが分かる。教材の来待石は子どもにも十分彫れる軟石で、体験学習の材料としては申し分のないものであった。道具については、専門家用でないにしても、一般的に十分な作業がおこなえるものが用意された。ただ、子どもには鑿と石頭の重量バランスが若干悪く、次回における改良点であろう。

図5 彫刻の印象は、参加前に比べてどのように変化しましたか



Q6. 「彫刻教室に参加して、彫刻の印象は、以前と比べてどのように変化しましたか」の問い合わせでは、「とても良くなった」が50% (12/24名) と一番多く、次いで「良くなった」が、29% (7/24名) と続いている。(図5)

ふたつの合計で約8割の参加者が、彫刻教室参加によ

り彫刻への印象が、より良くなつたと感じていることが分かる。期待をもって参加してくれた子ども達に対し、指導する側に確実な技術と表現力が備わっていることは重要であり、彫刻シンポジウムの意義が問われる場面でもあろう。彫刻の完成が達成感、充実感を生み、作品を愛おしむ気持ちは、誰しも変わらぬ感情であろう。しかし、完成された彫刻に託されたメッセージは、かたちの中に存在するものが全てではない。かたちを創り上げた時間が、きわめて重要な意義をもつものである。「悪くなつた」「とても悪くなつた」を回答した参加者は、一人もいなかつたが、「どちらでもない」は21% (5/24名) であった。これに回答した人は、Q1. で以前から彫刻に興味があったと回答していることから、これらの参加者は、彫刻教室の参加前後で彫刻の印象に変化がなかつたと判断できる。

(3) 総括

アンケートの結果を総括すると、彫刻教室への参加者の多くは、少なからず造形や彫刻に興味を持ち、活動過程では、準備された材料や道具を駆使し、講師のアドバイスによって、制作を具体化していくこと。また、自分の意志において制作することで達成感や充実感を味わい、日常生活とかけ離れた体験学習を楽しいと感じていることが見えてきた。結果、参加することで彫刻を理解し、好印象になったことも見逃せない点であろう。

(4) 参加者の感想

参加者には、感想文の提出を実行委員会より依頼した。そのいくつかを抜粋して原文のまま掲載する。

「家族で米子彫刻ロードを散策するとき、今までとは違う視点で色々話せる楽しみも増えました。素敵な出会いに、心から感謝いたします」

「町にある彫刻を意識するようになり、彫刻がたくさんある町をすてきだなと思うようになりました。このような取り組みが多くの町で拡がっていきますように」

「この彫刻教室では、協力することと、想像を豊かにすることを学びました。どれも一つ一つが宝物になっていくようでした」

「これから出会う遺跡や彫刻に残るのみの跡に、人の汗と意図を感じることができるようになったと思います」

「ぼくの夢は、将来彫刻家になることです。そしてい

い作品を作つていろいろなところにかざつてほしいです。ぼくが彫刻家になつたら、ぼくが先生たちに出会つて幸せな気持ちになつたように、ぼくの作品を見て幸せな気持ちになる人がたくさんできたらうれしいです」

「私は石を作る人の思いや願いで全く違うものへ変わることを実感しました。みなどれも同じ石のはずなのにやわらかさや暖かさを感じる石があります。人を真似して上手なものを作るとかじやない。失敗してもいいから自分らしいのを作る。それが本当に大切なことではないでしょうか。作ったものはその人の個性の塊です。だからその人にしか作れないものだと思います。」

4. おわりに

本研究である米子彫刻シンポジウムにおける「彫刻教室」の実践で明らかになったことは、体験学習におけるアート教育が生きた対話を生み出し、個々の造形活動が新たなコミュニケーションを創造する役割を担っていると、確認できることであった。18年という時間のなかで、米子シンポジウムの彫刻教室には、延べで291名の参加者があった。今回の参加者から「初めて参加したとき娘は11才。現在21才になった彼女と10年前の思い出を語り合うことができました」という、素敵な感想文を読ませてもらうことが出来た。長期間に及んだ一つの体験教室に、このような多数の参加者があったことは、特筆すべきことであろう。

また、子ども達が、彫刻に興味を持ち、心から造形することを楽しんでいることに感動した。そして、学校教育には難しいアート活動が、地域の体験学習の中に発見できたことは、筆者にとっても大きな収穫であった。このシンポジウムに参加して、作品を媒体に多くの人々が意思を伝達し合うことで、時間を越えた豊かなコミュニケーションが形成されていることも認識できた。

表現者として、また、美術教育に携わるものとして、彫刻が地域や人を結びつける役割を果たし、これからも、新しい豊かな社会作りに貢献するような活動を支援していきたいと考えている。

註及び参考文献

- 1) 佐藤学『子どもたちの想像力を育むアート教育の思想と実践』(東京大学出版会、2003) p.viiを参照。
- 2) 佐藤学『子どもたちの想像力を育むアート教育の思想と実践』(東京大学出版会、2003) pp.ixを参照。
- 3)『88米子シンポジウム図録』(米子彫刻シンポジウム実行委員会、1988)
- 4)『90米子シンポジウム図録』(米子彫刻シンポジウム実行委員会、1990)
- 5)『92米子シンポジウム図録』(米子彫刻シンポジウム実行委員会、1992)
- 6)『94米子シンポジウム図録』(米子彫刻シンポジウム実行委員会、1994) pp.74-77
- 7)『96米子シンポジウム図録』(米子彫刻シンポジウム実行委員会、1996) pp.40-43
- 8)『98米子シンポジウム図録』(米子彫刻シンポジウム実行委員会、1998) pp.42-43
- 9)『2000米子シンポジウム図録』(米子彫刻シンポジウム実行委員会、2000) pp.26-29
- 10)『2002米子シンポジウム図録』(米子彫刻シンポジウム実行委員会、2003) pp.32-35
- 11)『2004米子シンポジウム図録』(米子彫刻シンポジウム実行委員会、2005) pp.32-37
- 12) 中原祐介『ブランクーン』(美術出版、1986) p.186
- 13) V・ローエンフェルド、竹内清、堀ノ内敏、武井勝雄訳『美術による人間形成』(黎明書房、昭和38年初版) pp.78
- 14) 金子一夫『美術科教育の方法論と歴史』新訂増補(中央公論美術出版、平成15) pp.64-65

執筆者

佐善 圭 芸術学部 美術科 非常勤講師
SAZEN Kei School of Art/Department of Fine Arts/Part-time Lecturer